湘南藤沢におけるインバウンドプロジェクト
Inbound Projects in Shonan Fujisawa Area

安田　震一
Shinichi Yasuda

要旨 : 本稿は 2021 年度の「湘南藤沢インバウンドプロジェクト」に関する報告である。多少 2015 年の藤沢市・藤沢市観光協会との三者連携協定について触れるが、主に近況の展開となる。その中でも寒川町観光協会との連携協定、イベント、コロナ禍によっての影響についても触れながら主なイベントについて紹介する。本学部の地域連携は学生の学びを拡大することが趣旨であり、可能な限り大人に成長して欲しいとの期待が大きい。また、鎌倉市との今後の提携のための学生と市との意見交換会を実施し、湘南地域のそれぞれの地区において観光に関する課題があることを実感できた。

キーワード：藤沢市、茅ヶ崎市、寒川町、鎌倉市、地域連携、活性化

Abstract: This article is a report on 2021 academic year Shonan Fujisawa Inbound Project, which began with the agreement with Fujisawa city, Fujisawa city Tourist Association and Tama University Cooperation for tourism in 2015. The article introduces the new working relationship with Samukawa Town, as well as major events while dealing with COVID 19. The working relationship with Tama University School of Global Studies and the local area of Shonan and Fujisawa promotes and expands student's learning process with hopes that youngsters will grow up to be a responsible adult. Furthermore, for preparation of a working relationship with Kamakura city, a discussion roundtable with students and city officials was organized. We learned that each district within Shonan area has their own challenges concerning tourism.

Keywords: Fujisawa city, Chigasaki city, Samukawa town, Kamakura city, regional collaboration, activation

はじめに

本稿は湘南藤沢地域におけるインバウンドプロジェクト（2017 年度より継続）の報告である。

2015 年 11 月に藤沢市・藤沢市観光協会・多摩大学によって観光連携等協力協定が締結された。ホスピタリティ・マネジメント・コースの中核となる教員ならびに地域活性化委員（教職員）は 2016 年度以降、学内共同研究を申請し藤沢市の観光振興のために様々な取り組みをおこなってきた。本共同研究では、藤沢市の観光振興へのさらなる貢献、その後、

茅ヶ崎市、寒川町などを含め「湘南藤沢におけるインバウンドプロジェクト」の継続、発展そして新たな発見を目的として努力している。

2019 年度は、前年度に続き、藤沢市内のレストラン･土産屋等の多言語メニュー作成支援、六会・湘南台地区の環境保全の企画・運営、湘南の海洋保全活動への参加・協力、東京オリンピック・パラリンピックの機運醸成活動への参画、藤沢市の観光促進事業の支援等をおこなった。

また、台湾の高雄およびタイのバンコクにて開催された国際観光フェアーに教職員を派遣し、インバウンドの誘致、藤沢の知名度を広める、海外の大学・組織と本学部との提携・連携を模索するなど効率の良い出張となった。2020 年度はこれらの活動に加え、寒川町観光協会 HP の多言語化支援活動を行い、コロナ禍に見合った地域活動を行った。

2021 年度も、これらの活動を継続しながら、藤沢市、藤沢市観光協会、寒川町観光協会等の複数の組織から協力要請のある活動を実施していく。新規・継続いずれの活動でも学生と教職員が関わり、地域・社会との協働を実現すると同時に、多摩大学グローバルスタディーズ学部が藤沢市内の高等教育機関としていかに貢献ができるのか、延期された東京 2020 オリンピック・パラリンピックを見据えて考究する。

現在、本学部は多くの地域連携プロジェクトに携わっていることに関しては、2016 年度から 2019 年度まで取り組んだ「SAVOR JAPAN 農泊食文化海外発信地域」[1]が大きく影響している。この申請のために藤沢市を始め、茅ケ崎市および寒川町など 2 市 1 町と連携させていただいたことから地域での信頼を徐々に得ることができた。そこから様々な点と点が線で結ばれるようになったと言えよう。今回の報告では、昨年の展開を中心に、一部について紹介することにする。

地域連携の背景

多摩大学グローバルスタディーズ学部の共同研究は、授業およびゼミナール以外に外部での学びを教育の一環として拡大してきた。学部にとって大きな役割を果してきていると言えよう。地域連携および地域協働など様々な形態のプロジェクトおよびイベントが配置できるようになった。通常、共同研究の報告と聞くと、他大学の教員との研究・調査などの報告だと思われるであろう。しかし、本学部では、教室のみではなく学生を外部に誘導する、そこでの学生の学びの可能性を引き延ばすための共同研究でもあり、同学部内での教員の協力および連携を強化する目的もあるという理解で共同研究を認識していただきたい。

上述したように 2015 年 11 月 4 日、藤沢市・藤沢市観光協会および多摩大学グローバルスタディーズ学部の三者連携協定締結を皮切りに年々キャンパスのみでの教育から藤沢市を中心とした湘南地域全体がいわばキャンパス・教室に例えられるほど拡大した。こうした展開は外国人アンケート調査を堂下恵教授のゼミナールが行ったことから始まった。現

在では、藤沢市、茅ヶ崎市、寒川町から鎌倉市などに規模は異なるが、それぞれ何らかの連携を行えるまでに成長した。

地域での取り組みで最も大きなメリットは学生が大人と「仕事の現場」で接することができ、その場で対応を判断する、行動するなど教室とは異なる環境でものごとを察知することができるようになる。さらには、学生が観光協会の仕事内容を知ることができる、その他訪問させていただく組織の様子も知ることができる。こうしたことで将来的に就職につながることもあると期待している。

本報告では、ここ数年の展開および今後のポテンシャルに関してまとめることにする。

「多言語メニュー作成支援」（Fujisawa Foodies）

これは藤沢市内の飲食店のメニューを多言語化する活動である。これまで江の島の「市民の家」から始まり、藤沢駅周辺（2018 年～ 2020 年）、再度江の島周辺（2021 年）と活動してきた。

そうした活動が今度は湘南台近辺の店舗の多言語化を行うことにつながったと言えよう。

当初 2020 年東京オリンピック・パラリンピックのための多言語メニュー作成は英語を使いたい学生に人気のプロジェクトであった。同プロジェクトが三者提携の中心と言えるであろう。これまで、毎年の夏季に開催してきたが、2021 年のみ新型コロナウイルス感染拡大のため春休み開催となった（図 1、図 2）[2]。その後は英語教職課程の学生も参画できるようになった。作業の会場となった施設は江の島市民の家、藤沢市役所 5 階の会議室などなどにて作業させていただいた。町田や相模原などの学生で 4 年間を通して江の島や藤沢で下車したことの無い学生にこの地域を知ってもらうことができる機会でもあった。小さなことではあるが、地域との関連性や一体感は学生にとっては重要である。

「地域連携の背景」と重複になるが、この湘南藤沢におけるインバウンドプロジェクトの利点として挙げられることは、学部生の対応は大人であることから、まずは他者に対して挨拶ができること、時間厳守、責任感など社会では当たり前なことを身に着けられることであろう。さらには、上述した責任感に関連するが、数名の学生でローテーションを組んでいるため適当に今日は疲れたから、今日は暑いからと言って簡単に休むことはできない。ある日程に合わせて体調を整えることを理解していない学生にとっては、スケジュール管理が難しいところである。社会人としては当たり前なことを守ること、「普通の」大人のスケジュールに合わせる対応を身に着ける必要がある。学習面で言えることは、TOEIC の成績が向上したことである。

江の島での作業のお陰で、卒業生が近場で就職していることも知ることができた。今後、卒業生をフォローする共同研究を視野に入れることも考えられる。

「江の島フィッシャーマンズ・プロジェクト Enoshima Fisherman's Project」

藤沢市における協力体制はほかにもある。2015 年から始まった江の島フィッシャーマンズ・プロジェクトの活動には「海藻シンポジウム」、「船釣り教室」、「体験学習」、「藻場保全活動」、「海底清掃」など、五感にうったえる活動を心がけている取り組みである。SDGs・磯焼け・マイクロプラスチックなどの言葉をよく耳にする様になり、そうした問題の解決に取り組んでいる。本学部生にとって身近な江の島の海底が、今どの様な状態なのか知る必要があろう。

図 1 多言語メニュー作成支援（Fujisawa Foodies）江の島市民の家にて、2022 年 2 月

図 2 多言語メニュー作成支援（Fujisawa Foodies）江の島市民の家、2022 年 2 月

海藻シンポジウムに本学部生が初めて参加したのが2017年で、海の資源が減少することで魚介類も減少することを知ってもらい、対策としてワカメの種付けを行い、2月半から3月末にワカメを刈り取りして食することから学ぶプロジェクトにも6年参加させていただいている（図3図4）。2022年の刈り取りは残念ながらコロナのため中止になったこともあったが、今後ウィズコロナとなった際、イベントが復活することを期待している。

同プロジェクトはキャンパスに近い江の島、片瀬漁港で行われている。多くの小学生や保護者の対応または誘導を担当させていただいている。本学部生は参加者が安全にイベントに参加できるように対応し、責任感を養うことができるイベントである。

「寒川町観光協会との連携」

一般社団法人寒川町観光協会（以下：寒川町観光協会）とは、2017年から芋掘りおよびひまわりの摘み取りイベントなどに学生を派遣させてもらったことからの連携で、ゼミ生の中には、「観光協会がこうしたイベントを企画、主催することをもっと前に知っていたら、自分にとっても就職先として考えた」と意見を述べてくれたことで、企業や観光協会などの組織について理解していないことが多々あることを教員側が知ることができた。

今では寒川町観光協会のホームページのお勧め観光地の多言語化を2年続けて担当させていただいている。このプロジェクトは2020年から始まり、新型コロナウイルス感染拡大の時期にステイホームで携われたことが功を奏し、多くの学生さんが携わってくれた。寒川町観光協会のホームページには翻訳を担当した学生の名前が記載れていることから、「やりがい」、「頑張ろう」などのモチベーション向上につながったといえよう。さらに、スムーズに作業が進んだのは、家で翻訳作業に携われたことである。ローテーションで集合したり、体調不良で休んだり、他の日程との重複など、日程調整に苦労することは無かった。

昨年は、本学部生で書道家の粟津紅翔さんがコロナ禍の「まん延防止等重点措置」を書にして寒川神社に奉納したいと申し出た。そこで寒川町観光協会から寒川神社に打診していただいた。残念ながら、寒川神社には書道の専門家もいらっしゃるので、今回のご要望を受けれられないとなってしまった。そこで観光協会がイベント[3]を企画してくださった（図5図6）。

さらに、2021年6月10日（木）に本学部は寒川町観光協会と観光に関する連携協定を締結した[4]。

図 3 江の島フィッシャーマンズ・プロジェクト（海藻シンポジウム）片瀬漁港
参加者のグループ分け、その後誘導、**2021** 年 **12** 月

図 4 江の島フィッシャーマンズ・プロジェクト（海藻シンポジウム）片瀬漁港
ワカメの種付け、**2021** 年 **12** 月

図 5 粟津紅翔 書道作品「さむかわ冬のひまわり 2021 らいとあっぷ」寒川中央公園、2021 年 11 月

図 6 粟津紅翔 書道作品「さむかわ冬のひまわり 2021 らいとあっぷ」寒川中央公園、2021 年 11 月

「鎌倉市および鎌倉市観光協会との意見交換会」

鎌倉市観光協会から今後のインバウンドに関する意見交換会を行いたいとのことで、2021 年 12 月に本学部生 8 名と観光協会から 4 名の職員と鎌倉の情報およびイベント情報の発信について話し合った（図 7、図 8）。

本学部としては、鎌倉藤沢観光協議会において両市の観光を促進することに協力させていただけることで、鎌倉から藤沢へ観光客を誘導する、逆に藤沢から鎌倉へ誘導することも視野に入れて学生、地元と協力できればと期待している。学生目線や発想での提案は、さすがに新鮮に聞こえた。こうした小さな交流から 2022 年 11 月 1 日、鎌倉市、鎌倉市観光協会と多摩大学グローバルスタディーズ学部の三者包括連携協定を結ぶことができた。

その他の展開として

グローバルスタディーズ学部の場合、地元との連携から新たな展開が見られるようになった。その一つは宮治正志藤沢市副市長から藤沢を紹介するような場を作れないかとの打診があり、それなら藤沢市にて活動している方々を講師としてお話してもらう科目を配置することにして、趣旨は大学の地元のことを知ってもらう、興味を持ってもらう、そして定住してもらう意味で当初は「藤沢ストーリー」[5] と題して開講した。その後 2022 年の新カリキュラムからは「Discover 藤沢・湘南」と題して継続している。

その他、これまでの「七福神めぐり」のサポート、JC サッカー大会のサポート、華道の展覧会などにも参加させていただき、地元について学ぶ、地元の皆さんと向き合う、日本文化を修得するなど様々な学びがある。

まとめ

残念ながら、2020 年から 2021 年はコロナ禍のため多くのイベントが中止または縮小開催、変更などとなった。とは言え、学生を地元に派遣し、またはオンラインで対応させていただけたことに感謝し、次年度はより多くのイベントが対面で復活、拡大されることを期待している。今後、ウィズコロナとなり、今までの依頼が戻ることを期待している。特に、藤沢浮世絵館とのコラボレーション、地域を巻き込んだ国際交流のプログラム、留学生と観光のイベントなどすべて復活することを期待している。

とりわけ、グローバルスタディーズ学部に関してはキャンパスでの座業は当たり前、さらに地域に出ることによって新たなつながりができ、そこから連携へと進展することで地域の活性化、さらには貢献できる環境ができつつあることで、地域全体が大きな学びの場となっている。

図 7 鎌倉市観光課と SGS 生の意見交換会、2021 年 12 月

図 8 鎌倉市観光課と SGS 生の意見校会、2021 年 12 月

注

[1] 韓準祐「SAVOR JAPAN 農泊食文化海外発信地域」の申請に関する報告、『紀要』第14号、2021年、多摩大学グローバルスタディーズ学部、p. 149-165.

[2] 本稿で使用する写真はすべて多摩大学グローバルスタディーズ学部ホームページおよびイベントにて学生本人および保護者様にも確認していただいており、掲載・使用済である。よって、肖像権は多摩大学に所属する。

[3] 「さむかわ冬のひまわり 2021 らいとあっぷ」2021 年 11 月 13 日、寒川中央公園にて

[4] 「多摩大と連携し独自の観光振興」神奈川新聞、2021 年 6 月 12 日、「多摩大と寒川町連携・地域経済活性化に寄与めざす」2021 年 6 月 16 日、朝日新聞。

[5] 「藤沢のキーパーソンが講師」朝日新聞、2019 年 12 月 7 日（土）、「藤沢のキーマン講師に公開講座」神奈川新聞、2019 年 10 月 24 日

Accepted on 7 November 2022